

北の国のアフリカ・コレクション

望月 克哉

アフリカ

「ウプサラに所在する北欧アフリカ研究所図書館は、巧みな方式と体系的なやり方で現代アフリカについて独自のコレクションを構築した。」これは二〇〇六年度に同図書館がスウェーデンの「ライブラリー・オブ・ザ・イヤー」を受賞した際の選評である。設立の趣旨である北欧諸国に対する貢献のみならず、世界に向けた研究素材の提供を指向しつつ、地元へのサービスも忘れない姿勢が高く評価されたのであった。

●開かれた専門図書館

北欧アフリカ研究所 (Nordiska Afrikainstitutet / The Nordic Africa Institute 以下NAI) は一九六二年にスウェーデンのウプサラ大学で設立されたのち、同国の政府機関となつて今日に至っている。長くスカンジナビア・アフリ

カ研究所 (Scandinavian Institute of African Studies) として知られてきたが、改称されて現在のものとなった。その名称にもあらわれているように北欧諸国の共同研究機関としての性格を有しており、デンマーク、フィンランド、アイスランド、ノルウェイ、スウェーデンの五カ国から財政支援を受けつつ、各国出身の研究員も配置している。

現在、NAIはウプサラ市街の中心部に位置する商業ビルの複数のフロアを使用している。一階中央のエントランスを入ると、すぐ左側に研究所図書館があり、明るくゆったりとしたスペースがひろがる。現代アフリカの専門図書館として、社会科学を中心に七万タイトル余りの単行書や報告書を所蔵し、一般の利用にも供している。開架方式で理論書以外は国別に配

架されており、数として多くはないがアフリカ現代文学や写真集も並んでいて、各所にディスプレイされている民芸品とともに来館者を楽ませている。段差のないフロア、採光にも配慮した閲覧者用キャレル、一角に設けられたセミナー用の会議スペースなど、施設面もまたユーザー・フレンドリーである。

北欧諸国の居住者なら誰でも借り出すことができ、利用期間は三〇日(更新可能)で、貸し出しの上限は三〇冊とされている。主たるターゲットである研究者や学生はさらに優遇されており、他に利用希望者がいない場合には最長一五〇日、冊数も無制限とされている。研究所が給付する奨学金により滞在研究を行っている学生たちの共同研究室には、いつも借り出された書籍がうずたかく積み上がって

いた。彼(女)らにとつてさらに有用なのが、憲法をはじめとするアフリカ各国の公式文書類で、開発計画や人口センサスはもとより、経済、保健衛生、教育、ジェンダー等に関する公式統計や報告書が収蔵されている。開発分野をはじめとして五〇〇種に上るアフリカ関連雑誌ともども、文献研究のための豊富な材料がそろっている。研究所関係者に対しては、図書館が定期的に新規受け入れ図書の内覧会を開催しており、いち早く新しい文献を手にとることができるのも大きなメリットである。

もうひとつ、NAIの所在地であるウプサラにおける図書館間の連携にも言及しておきたい。歴史あるウプサラ大学図書館はもとより、社会科学系では元国連事務総長を顕彰したダグ・ハマシヨルド図書館も近隣であることから、それらの間で相互利用が実現している。訪問研究員や奨学金を受給する大学院生が研究所に到着すると、図書館員による「館内ツアー」が用意されているほか、ウプサラ大学図書館の訪問と利用案内がアレンジされるので、複数の図書館の活用にもすぐに習熟できる。

● 進化するドキュメンテーション・センター

NAI図書館のスタッフは約一〇名と決して多くない。館内での閲覧やレファレンス関連業務は一〇二名で担われている。実際のところ、新規受入人数は二〇〇五年の三三〇〇タイトルをピークに減少に転じており、整理やカタログ化に割かれる人員や労力も減ってはきている。しかしながら、このことをもって図書館の進化の停滞とみるのは誤りである。

試しにAfricanityと称されている図書館カタログで検索してみれば、その充実ぶりに目を見張るだろう。二〇〇五年末までThe Nordic Africa Institute's Online Catalogue (NOAK)と称されていたシステムを更新するにあたり、オンライン・カタログとしての内容をより的確に反映したものにするということ、この名称が採用された。単行書、報告書、公式文書、定期刊行物、論考などをテーマ別、地域別のキーワードにより整理したカタログであり、使い勝手はすこぶるよい。もちろん、その内容はスウェーデンの図書館の統一カタログ (LIBRIS) に載録されているほか、NAI図書館としてア

イスランド、デンマーク両国の統一カタログへの協力も行っている。しかしドキュメンテーション・センターとしての進化は、ここにとどまらない。急速に進みつつある電子出版を視野に入れつつ、NAI図書館はデジタル・リポジトリ構築へと踏み出している。刊行形態の変化への対応ということもさることながら、むしろ遠隔地のユーザーのニーズに応えるという狙いもある。主たる対象がアフリカの大学や研究機関であることは言うまでもない。残念ながら、アフリカ諸国のなかでデジタル・リポジトリ構築の動きがあるのは南アフリカ共和国のいくつかの大学のみと言われている。とはいえ、アフリカ関連の定期刊行物についても電子化が進んでおり、これに伴う新たなサービスが展開されていることからしても、NAIが指向する方向性は正しいと言えるだろう。

組織運営にも、この方向性が反映している。NAIには、渉外活動やウェブサイトの運営を行うコミュニケーションズ部門が存在する。かつては図書館とは別の業務分野と位置づけられてきたが、今日では両部門の活動がますますオーバーラップするようになって

いる。その背景にはインターネットの発達があり、情報やデータの共有化が格段に容易になった事情がある。より広い意味でのアーカイブス機能を実現するにあたり、NAIは単独での展開を図るのではなくウプサラ大学図書館で開発されたスウェーデン学術アーカイブス・オンライン (通称DIVA) に加盟した。同国内の二〇大学がメンバーとなつていて、DIVAは、デジタル・アーカイブスとしてのみならず、電子出版システムとしての機能も有している。NAIの担当者は、これをウェブサイト上の「電子アフリカ図書館」とも称しているのである。

● 転機に立つ図書館

今年、NAIは現在の所在地を去り、郊外に移転することが決定している。その主たる理由は財政的なものと言われている。実際のところ、ここ数年にわたり予算の圧縮が続いており、図書館もその例外ではない。そのプログラム予算は毎年二〇パーセントもカットされてきた。上述した電子化への対応というのも、一面では経費削減に対応するための方策でもあったわけである。

アーカイブスという面では、すでに単独での取り組みは放棄されており、大学群を基盤にしながらオープン・アクセスの方向に進んでゆくのではないかと思われる。デジタル・リポジトリ構築をめざすNAI図書館の動きも方向性としては同じであり、その過程でアフリカ諸国の大学・研究機関とのパートナーシップが実現すれば、それは望ましいことであろう。ドキュメンテーション・センターとしての進化の方向はもはや変えようがない、ということでもある。

問題があるとすればアフリカ諸国とのデジタル・ギャップであろう。NAI図書館のアフリカ・コレクションが真に生かされるのは、決して北欧諸国においてだけではない。研究素材の提供がなされねばならない先は、他ならぬアフリカ諸国の大学や研究機関なのである。インターネットの発達はそうした契機を与え、その地平を拓いてくれたというものの、それが本当に成果を生み出すのかは、今後の取り組みにかかっていると言えるだろう。

(もちづき かつや／アジア経済研究所 研究支援部)